HUNTER×HUNTERの世界

クルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界

【Ｎコード】
Ｎ７１８３Ｚ

【作者名】
クルト

【あらすじ】
ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲに行くことになってしまった主人公の奮闘記

旅立ち（前書き）

完全初心者が趣味で書いているものなので誤字や文面がおかしい部分もあるかと思いますが、それでもよろしければ読んでみてください。

旅立ち

ここはどこだ？天国か？
目が覚めると、真っ白な何もない空間を漂っていた
「おい、お前のせいで父上に怒られたんだぞ、責任とれよ」
声のする方を振り向くとさっきまでは誰もいなかったはずなのに、
偉そうな態度の子供がいた。

「いきなりなんなんだよ、それよりここどこだ」
「めんどくせえやつだな＞ゴツン＜？（＞д＜）　！！」
「八つ当たりするでない、お前のミスであろう」
子供の後から光と共に立派な髭を生やした爺さんが現れ、杖で子供の頭を叩いた。
「いきなり何するんですか父上」
「もういい、お前は黙っておれ、少年よいきなりのことで混乱していると思うが
落ち着いて聞いてくれないだろうか」
取り乱しても何も解決しないだろうと思い。
「分かったまずこの状況を説明してくれ」
「まず自己紹介からするかのうわしは神じぁ、
そしてこのバカ息子に人間界の寿命の管理を任せていたんだが、
このバカ息子のミスでおぬしの命の源であるロウソクを消してしまったのじぁ、
本当に申し訳ないお前も謝らんか」

「すみませんでした」
「どうゆうことだよそれ！」
「こんなこと絶対にあってはならんのじぁがと言っておぬしを生き返らせる訳にもいかんのだ、

そこで二つの選択肢を選んでもらう、一つはこのまま天国に行くか、
もう一つは別の世界に行ってもらう、
その世界はマンガのＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲじゃもちろん謝罪の意味も込めて特典はつける２個までだ、
あと不死とかはなしじゃ」
「なんでＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲなんだ？」
「わしが好きだから・・・・・」

「特典の内容は俺が決めていいんだな、少し考えさせてくれ」
ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲあの世界は誰がいつ死んでもおかしくない死と隣り合わせの世界だ、
慎重に考えないとすぐに死んでしまう。

「まず、努力した分だけ結果がでる体、（訓練しても結果がでないと意味がないからな）
二つ目は修行ができる空間で効果は、その空間で何年たっても年を取らないそれと修行内容にあった環境を再現できる効果をつけてくれ、これは俺の念能力とは関係ないものに
（能力のメモリーの無駄使いはしたくないからな）」

「ん～～一つ目はいいが、二つ目については少し厳しいのう、制約を付けるぞ、
無制限は無理じゃから使えるのは１回だけ部屋の使用時間は２０年」
「容姿は特典の範囲なのか？」
「それはサービスじゃから心配ない」
「だったら白髪で目の色は緋色で」
「それじゃどうする修行してからＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの世界の送るでいいかの？」

「それでいい」

主人公設定（前書き）

修行及びハンター試験合格については割愛させてもらいます、
一ツ星ハンターになったところから本編は開始させてもらいます。

主人公設定

名前：クルト
性別：男
性格：慎重に考えてから行動タイプ
年齢：２３歳（原作開始時）
職業：一ツ星ハンター（ブラックリストハンター）
容姿：白髪に緋色の目（緋の目ではない）
髪型は、さわやかナチュラルヘア
系統：変化系
能力：闇牙（具現化系、変化系の複合技）
日本刀の柄を具現化し柄にオーラを込めることでオーラの刃をつくる、
ほかにも電気や水（蒸気、氷）風の刃に変化させることもできる、
２本具現化できるがオーラの消費量が２倍に増える。
鞘も具現化可能で抜刀術も可能
（烈火の炎の闇水をイメージして作った）
制約
・常に刃を維持するためにオーラを消費する。
・電気、水（蒸気、氷）、風の刃に変化させるとオーラの消費量がオーラの刃の２倍消費する。
・闇牙を具現化せずにオーラを電気、水（蒸気、氷）風に変化させると
威力及び効果が６割減少する。
風神雷神（変化系、強化系の複合技）
末梢神経を電気に耐えれるように強化し直接電気流し込み、
体に風を纏い高速戦闘を可能にした、

闇牙の制約で（闇牙を具現化せずにオーラを電気、
水（蒸気、氷）風に変化させると効果が６割減少する）
とあるが闇牙を具現化してさえいれば
１００％の効果で使用可能

（キルアの神速を参考にして作った）

制約
・１日に使用可能時間は１０分で能力発動から１０分たつと自動的に強制解除され
２４時間使用不可能になる

主人公は常に日本刀を２振り常に持っていて格下相手にはそれで対応する。

第２８７期ハンター試験原作介入（前書き）

主人公設定で少しだけ追加しました、
今後もこういったことがよくあると思いますので
そこは責めないでもらえると助かります。

第２８７期ハンター試験原作介入

修行を終えた俺はハンターになるために、第２８４期ハンター試験を受け合格した、
２０年ひたすら修行したかいもありあっさりと合格した、
原作が第２８７期ハンター試験なので原作の３年前みたいだ
原作に介入しようと決めていた俺は実戦での戦闘経験を積むために賞金首を探して世界を飛びまわる生活をしているとその功績が認められ
３年後一ツ星ハンターになることができた。

どうゆう方法で原作介入しようか悩んでいると

『プルルル』

携帯がなり番号を確認するとネテロ会長だった

ネテロ「クルト仕事の依頼があるんじぁが第２８７期ハンター試験の試験官を
やってくれんかの」

原作介入できるチャンスと思った俺はその依頼を受けることに決めた、
指定された場所に向かうとメンチと組んで試験官をやってくれと言われた、
会長からメンチは食の試験をするらしいから暴走しないか監視してほしいと、
ある賞金首を追っていた時にメンチと知り合い食のことで意気投合

した俺なら
暴走しても止めることができるだろうとの判断だった。

メンチ「ところでクルト試験内容は何にるの？」
クルト「薬草にしようかと思う」
メンチ「薬草ってもしかしてあれのこと？あんたもイジワルね～」

試験会場となっているビスカ森林公園には香辛料で
有名なパドキアという珍味の薬草がある、
薬草を取ってくる簡単そうな内容だが問題は薬草のある場所が問題
だった
魔獣の巣のすぐ近くにしか生えない薬草なのだ魔獣の強さはそれほ
ど強くないので
受験生を試すには丁度いい内容になっている
原作でのブハラの試験内容にしようと思ったが、あんなとんでもな
い量の豚の丸焼きを
処理できる胃袋は持っていないため、この試験内容したのであった。

クルト「メンチは何にするんだ？」

原作知識はあったが確認のために聞いておくことにする、
現段階でもブハラの位置に俺がいることで原作を変えているため
今後どう原作が変わっていくか分からないからだ。

メンチ「寿司にしようかと思ってね」
クルト「寿司は海鮮魚だろうここには川しかないから味にこだわる
なよ、
洞察力を試す試験が味の試験に変わると意味ないからな」
メンチ「分かってるわよ、そんなことぐらい」
クルト「それならいい、そろそろ時間だな」

『ボ〜ン』

試験開始だゆっくりと扉が開いて受験生が見えてきた原作組はちゃんと
一次試験に合格してるみたいだ主人公組に会えたことに少し感動しつつ表情に
出さないよう受験生を観察する

メンチ「おまたせ、そんな訳で二次試験は私たち美食ハンターが担当するわ」
クルト「美食ハンターって俺は違うぞ「いいじゃないそんなこと関係ないわ」」

いや関係無いことないと思うんだが・・・・・まあいいか

レオリオ「美食ハンター?!」

クラピカ「美食ハンターとはあらゆる食材を探究しさらに新たな美味を創造する
ハンターのことだ」

さすがクラピカよく知っている、まあハンター目指すならそれぐらい知ってて
欲しいが知らないって受験者多いからな

メンチ「二次試験の課題は料理よ」

≪料理〜!≫

まあ気持ちは分からなくないがな、いきなり料理が課題と聞かされると、
ただそれはメンチの前では禁句だほら機嫌が悪くなった

メンチ「不満がある人は今すぐ帰っていいのよ～」

メンチの言葉に黙る受験生一同

クルト「ではまず俺から課題を出すこの写真にあるパドキアの葉を取ってきたもらう、
写真は人数分あるから心配いらない制限時間は2時間パドキアの葉を俺に
渡したものだけが次のメンチの試験を受ける資格を得る、
なおこの試験で他の受験生から奪うなどの行為をしたものは即刻不合格とする、
常に監視しているから注意するようにそれでは二次試験開始！！」

いっせいに散っていく受験生全ての受験生が見えなくなったのを確認して

クルト「メンチ落ち着け」
メンチ「分かってるわよ、でもあいつが」

あいつとはヒソカのことだ、俺達の姿を見た瞬間他の受験生に
解らないように念で威嚇してきてるからだ

クルト「気にするなそれに狙いは俺だろあいつ俺の正体に気ずいてるな」

さまざまな賞金首を捕まえてきた俺は一部のものたちには有名にな

っている、
白き閃光のクルトと言う異名までついてしまったのだ
俺の能力風神雷神を見たものがつけたらしい

２時間後・・・・・・・・・・・・。

結果は忠告したのにズルしようとした奴などいたが、原作組は全員合格していた
５２名少し少なくなってしまったが仕方ないこれぐらいクリアできないと
ハンターなどやっていけないからだ、
さてと問題は次だな暴走するよなやっぱり・・・・

メンチの暴走

メンチ「二次試験後半私のメニューは寿司よ」

≪寿司？≫

全く分からない受験生のためにヒントを出していくメンチしばらくすると、

４０３番レオリオが自身満々にレオリオスペシャルを出してきた、

どんなものか知ってはいたがあれは笑いをこらえるのには苦労した

あれは料理ですら無い・・・・・・・

その後も次々と料理をもってくるがこいつらセンスがなさすぎるぞ

ハンゾーが寿司を作ってきたが美味しくないからダメだった、

それを聞いたハンゾーがついに爆弾を投下した

ハンゾー「なっなんだと～！握り寿司ってのは一口サイズの長方形に握って

その上にワサビと魚の切り身をのせるお手軽料理だろうが～～～！」

あ～～あこうなることは解っていたがこれでほかの受験生にバレた、

それを聞いたメンチはキレてしまい味の審査になってしまった

クルト「メンチいい加減にしろ」

メンチ「黙ってて」

これ以上美食ハンターでもない俺が言っても逆効果だと判断した俺は、

会長であるネテロに電話をかけることにした

ネテロ「なんじぁクルト」
クルト「会長の言った通りメンチが暴走し初めてまして
だから言ったじぁないですか美食ハンターでない俺が
何言っても逆効果だとこちらに来て会長から注意してもらえませんか」
ネテロ「しかたないの～～～」

電話を切った俺はやっぱり全員不合格か会場の雰囲気が最悪だ

『ドーン』

２５５番「納得いかねえな、とてもハイそうですかと帰るきにならねえ、
俺が目指してるのはコックでもグルメでもないハンターだ！！
しかもブラックリストハンター志望だぜ美食ハンターごときに
合否を決められるのは納得いかねえって言ってるんだよ」

名前を忘れたがアホが文句を言っているこいつハンターを舐めてるだろ

メンチ「美食ハンターごとき？」

まずいなメンチはこいつを殺すつもりだ、あいつの発言には俺もカチンとくるが
試験官が直接手を下すのはまずいそう思った俺は

『シュ・・・ドン』

一瞬で数Ｍの間合いを詰めて２５５番を念を込めてないパンチで約１０Ｍほと殴り飛ばした、

俺の動きが見えていたのは受験生だと2人だけヒソカとイルミだ
クルト「メンチにも落ち度はあるがハンターを舐めるものいい加減にしろ
貴様ごときがハンターを愚弄するな、
次の試験のことを考えて手加減したが次はないと思え！！！」
２５５番「何するんだてめぇ」
俺が殴ったことでメンチは少しだけ落ち着いてきてるみたいだ
メンチ「２５５番あんたブラックリストハンター志望だといったわね、
それなのに彼のことも知らないなんてお笑いぐさね、
それにブラックリストハンター志望？？笑わせんなっつ～の
ハンターの中でも最も危険な分類に入るものよあんたなんか話にもならないわ」
俺の動きや外見から判断したのかクラピカが
クラピカ「まさか・・・・・・ その白髪に緋色の目のブラックリストハンター・・・・
もしかして白き閃光のクルト実感２３歳にして一ツ星ハンターになった」
やっぱりクラピカは知ってるみたいだな
彼もブラックリストハンター志望だから知っていても不思議じゃないからな
クルト「白き閃光と言うのは大げさだが多分それで違いない、
今ハンター協会に対応もらっているからおとなしく待っていろ」

それを聞いたメンチはこちらを睨んでたが受験者一同は
少し安心したのかさっきよりも場の空気が静かになった
変わりにヒソカからの挑発が強くなった、
少しするとハンター協会のマークが入った飛行船が到着すると
飛行船から飛び降りる人影が見える
登場がいくらなんでも派手すぎるだろ会長！

会長の説得もあり原作通り再試験になった課題は［湯で卵］
俺はこの世界の非常識さに慣れてしまっているがあんな断崖絶壁から
ちゅうちょなく飛び降りることのできることのできる原作組には呆
れる
結果２５５番は戦意喪失でリタイア二次試験合格者は４２名となっ
た

第２８７期ハンター試験終了（前書き）

二次試験が終了した所ですが主人公は試験官であるため、試験終了まで割愛させてもらいます。

第２８７期ハンター試験終了

二次試験が終了し三次試験会場に移動中の飛行船のとある一室
試験官であるサトツ、メンチ、クルトが集まり雑談している

メンチ「ねえ、どう思う？一度全員落としといて言うのもなんだけどさ、
なかなかの粒ぞろいだと思うんだけどね、私２９４番（ハンゾー）
なんか光ってたとおもうんだけどサトツさんどう？」
サトツ「ん～そうですねルーキーがいいですね今年は私は断然９９番（キルア）ですな」
メンチ「クルトはどう思った？」
クルト「ルーキーで言えば４０４番（クラピカ）彼は全体的にバランスがいいし頭の回転も速そうだそれ意外だと４４番（ヒソカ）だなあれは異質だ」
サトツ「彼は我々と同じ穴の狢です、ただ彼は我々より暗い部分を好むようですが」

ヒソカについては警戒しておくぐらいでいいだろう、
試験中に戦闘になることはないと思うが警戒しておいて損はないだろうからな

受験者のほとんどがぐったりとして次の試験に向けて英気を養っている、
三次試験会場であるトリックタワーに着いた
ここから最終試験までは介入することができないので
最終試験まで念の基礎等、訓練に励むことにするツェズゲラのようにサボって基礎をおろそかにしていると後で痛い目にあうことは分か

っているので、
俺は一日たりとも基礎訓練を欠かしてない。

四次試験が終了した、合格したメンバーを聞いた俺は
少し驚いたメンバーが一名増えているからだ原作だと9名
（ゴン、レオリオ、クラピカ、キルア、ハンゾー、ヒソカ、
イルミ、ポックル、ボドロ）だったがポンズが増えていた詳しく聞
いてみると、
レオリオのターゲットがポンズではなく、同じくポンズのターゲッ
トも
バーボンではなく他の受験生だったらしいやはり俺が介入したこと
によって
多少の誤差が出ているみたいだ原作でのポンズの死にかたに
多少の不満があった俺はもしポンズが合格し縁んがあれば
ポンズを鍛えることも有りなんじゃないかと思うようになったいた。

最終試験を終った結果はゴン、レオリオ、クラピカ、ハンゾー、ヒ
ソカ、
イルミ、ポックル、ポンズの8名やはりキルアは暴走してボドロを
殺した、
ゴン達はキルアの救出に向かうようだ、俺はこれ以上ゴン達に関わ
って
原作崩壊してしまうことを避けるためにキメラ＝アント編まではじ
っくり
待つことにする今まで賞金首を捕まえる生活ばかりしていたのでゆ
っくりと
世界を見て回りたいと思い皆に挨拶をして会場を後にした。
（ちなみに主人公の原作知識はキメラ＝アントの王宮突入までしか

ない）

出会い

最終試験会場を後にした俺はアジト（家）に戻り今後どう行動するか
考えるために列車での移動中
（列車等公共の移動手段を用いる時身分証明として
ハンターライセンスの提示が義務とされているが、
それは同時にライセンス狙いの請負人を呼び寄せることに
つながるので対応が面倒になる、それを避けるために
主人公は公共の移動手段を用いる時に
ライセンスの提示はしないことにしている
入国の時にはライセンスの提示はしている）

時間を潰すためにまだ読みきってない小説を時間があるので読んで
いると

「いきなり何するのよあんたたち！」

『プシュ、プシュ、プシュ』

『ブ～～～～～～～～ン』

≪なんだこれ蜂！くそっやっかいなこれでもくらえ！≫

『シュ～～～～～～』

何やら外が騒がしい、気になったので声のする方に行ってみると
全身黒ずくめのマスクを被った、サイレンサー付きの拳銃を持った

男たちと
無数の蜂が戦闘状態になっていた

これこの臭いは・・・・・・・ 催眠ガスか

ガスによって眠らされた蜂達が次々とおちていく

クルト「（まさか・・・・・・・ 蜂・・・・ 考えるのはあとだ、
とにかくこいつらを先にかたずけるか）」

こいつら程度に念を使うまでもないと判断した俺は
男たちの首目掛けて手刀をはなち気絶させることにする

『シュ・・・ シュ・・・・ バタッ』

手錠を男たちにはめて次の駅で警察に引き渡した俺は、
ターゲットになった人物を確認することにした

クルト『（やっぱり予想道理か・・・・・・）』

現場となった一室には気持ちよさそうに寝ている少女ポンズであった
同じく眠っている蜂たちを回収し終えた俺は
ポンズが起きるのを待つために先程の小説を読み始めるのであった

～ポンズｓｉｄｅ～

最終試験を終え無事ハンターになれた私は今思えばかなり浮かれていた

ゴン達はキルア救出に向かうと言うがそんな危険なことをしたくない
私はゴンの誘いを断りハンターとしての活動を開始するために
ヨークシンシティに向かう列車に乗った

車掌「切符を拝見いたします」

切符と一緒にライセンスの提示をすると車掌が少し驚いた顔をした

ポンズ「身分証明として提示が義務でしたよね？」

車掌「本物ですお返しします」

この行動によって生じる危険などこの時は
全く予想もしていなかった・・・・・

『ガチャ』

いきなりドアが開いたと思ったら黒ずくめの男達が
いきなり銃を突きつけてきた

ポンズ「いきなり何するのよあんたたち！」

『プシュ、プシュ、プシュ』

いきなりのことで動揺する私が弾をよけることができたのは
奇跡としかいえない、
私に攻撃してきた男達に蜂が一斉に攻撃を開始した

『ブ～～～～～～～～ン』

≪なんだこれ蜂！くそっやっかいなこれでもくらえ！≫

『シュ～～～～～』

一人の男がはなった煙を吸ってしまった
私はろくな抵抗もできないまま眠気が襲い
眠ってしまうのであった

ポンズ「（せっかくハンターになることが出来た・・・・・・・・・
）」

このあとの出会いで人生が大きく変わることをこの時は
知るよしもないポンズであった

～ポンズside　End～

ポンズ「あっ・・・」

しばらくするとポンズが目を覚ましたようだ

クルト「とりあえず落ち着けあいつらなら俺が掃除しておいた」
ポンズ「あっ、あなたは、試験官のクルトさん、
ありがとうございました」
クルト「ポンズなんでこんなことになったか分かってるか？」
ポンズ「・・・・・・・・・・・すいません分からないです」

俺は少し呆れながらも

クルト「プロハンターになってまだ1日しかたってないから仕方なくもないが
自覚がなさすぎる、まずライセンスを身分証明として提示したんじぁないか？」
ポンス「そうです・・・・・」
クルト「ライセンスを提示するということは、同時にライセンス狙いの請負人を
呼び寄せることになるハンター専用サイトに繋げる時も同様だ、
受かったからと言って浮かれてるとこういったことになる」

ポンズは顔を真っ赤にしながらうつむくのであった

ポンズ「私、何もできなかった・・・浮かれていたのはたしかです・

・・・・・」

もう見てられなかった俺は

クルト「ポンズ覚悟があるのならは戦うための力を教えよう、
ただその力を手に入れるともう後戻りはできない」
ポンズ「・・・・・・・・・・・・・ お願いします」
クルト「俺のことはこれから師匠と呼ぶように、
それと俺の言いつけはちゃんと守るように」
ポンズ「はい！、師匠よろしくおねがいします！／／／」

アジト

ポンズ「・・・・・・・・・師匠・・どこにむかってるんです？」

列車を降りた俺達は森の中を歩いている

クルト「すまん説明してなかったな心配いらない、
俺のアジトだ、これから教えるのは人に見せびらかす物でないんでな、
不安だと思うが今は俺を信じてくれとしか言えない」

ポンズ「いぇっ！疑ってるわけじぁなくて・・・」

クルト「これから教えることは早くても半年で
基礎が出来ると思ってもらえばいい」

２時間ほど森の中を進んで行くと検問と２０ｍもある屏が見えてきた

［私有地にて立ち入り禁止無断で侵入した場合の生命の保証はしかねます］

と看板に大きく書かれていた

門番がこちらに気がつき

門番「お帰りなさいませ、クルト様、そちらのお連れ様は？」

クルト「弟子をとることになってな」

ポンズは状況をつかめていないのか唖然としている、それからも数人とすれ違い、
みな≪お帰りなさいませ≫と挨拶する

ポンズ「さっきから気になってたんですけど、あの方達は？」
クルト「ここの管理を任せてるんだ」

３０分ほど進むと洋風と和風の一軒家が見えてきた

ポンズ「ここが師匠の家なんですか？」
クルト「ああ、そうだここら一帯は俺の私有地だから誰の邪魔も入らない、
今日は疲れただろうこの家を貸すから好きに使ってもらっていい
ポンズ、君は修行にのみ集中してくれたらいい」

と言って洋風の一軒家を指さす

～ポンズｓｉｄｅ～

列車を降りて私達は森の中を歩いている、私はだんだん不安になってくる、
もしかして騙されているんじゃないかと思い恐る恐る聞いてみる

ポンズ「・・・・・・・・・師匠・・どこにむかってるんです？」

そんな空気をさっしたのか師匠が

クルト「すまん説明してなかったな心配いらない、
俺のアジトだ、これから教えるのは人に見せびらかす物でないんでな、
不安だと思うが今は俺を信じてくれとしか言えない」

私は焦って

ポンズ「いぇっ！疑ってるわけじぁなくて．．．」

それから2時間ほど森の中を進んで行くと検問と２０ｍもある屏が見えてきた

［私有地にて立ち入り禁止無断で侵入した場合の生命の保証はしかねます］

えっ（；゜Д゜）！

どうゆうこと？

黒服の女性がこちらに気がつき

門番「お帰りなさいませ、クルト様、そちらのお連れ様は？」

クルト「弟子をとることになってな」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・もしかしてここって師匠の家？

それからも黒服の女性と数人とすれ違い、
みな≪お帰りなさいませ≫と挨拶する

ポンズ「さっきから気になってたんですけど、あの方達は？」
クルト「ここの管理を任せてるんだ」

ポンズ（なんで女性ばかりなんだろう・・・・・）

みな女性であることに少し不機嫌になるポンズだった

ポンズ（今日はいろんなことが有りすぎた明日のためにも早く寝よう）

～ポンズｓｉｄｅ　Ｅｎｄ～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7183z/

HUNTER×HUNTERの世界

2011年12月26日22時58分発行